

to不定詞のくり返しを避けるには

✓ “to” だけで代わりができます。

彼女は彼とはデートをしたこともないし、またそのつもりもない。
She has never dated him, nor does she intend **to**.

これまでもお話してきましたが、英語は経済性を重んじる言語です。094項では動詞のくり返しを避ける「代動詞」についてふれました。

次の例でもその特性を見ることができます。

▶ 彼女は彼とはデートをしたこともないし、またそのつもりもない。

→ She has never **dated him**, nor does she intend **to**.

ここでは“to”は〈to date him〉の代わりをしています。このように〈to不定詞〉の代わりをする“to”を「**代不定詞**」と呼びます。さらにいくつか例をあげておきましょう。省略されている部分も補っておきます。

▶ 「あなたと健二は結婚するつもりなの？」 「そうよ」

→ “Are you and Kenji **getting married?**” “We hope **to** (get married).”

▶ 母はやめなさいと言ったが、私は彼と出かけた。

→ I **went out with him** though my mother told me **not to** (go out with him).

“to”も残らないで、完全に省略されている場合もあります。

▶ 「エンジンをかけられるかい？」 「よし、やってみよう」

→ “Can you **start the engine?**” “Okay, I’ll **try** (to start it).”

“try”は“to”をとまなわずに、独立して使うことができます。〈try to〉としたのではくどい感じがするようです。

More 代不定詞は簡潔ですので歌詞などにも使われます。次はミュージカル“Evita”の中で歌われた“Don’t cry for me Argentina”の一節で、下線部は、“I never expected it to (impress me)”の意味です。

♪でも、何にも私は心を打たれなかった、期待もしていなかった♪

♪ But nothing impressed me at all. I never expected it to. ♪

分詞構文はどんな場合に使うのか

✓ あいまいさやきびきびとした感じを出すために使います。

抜き足差し足で、彼は鉄の扉に近づいた。
Walking on tiptoe, he approached the iron door.

分詞構文は時・理由・原因などを表す副詞節に書きかえられるとされてきました。しかし、実際には**すべての分詞構文がそれほど明確に区別がつくわけではありません**。そのどれを表すかは多くの場合、文脈とか、ことば以外の常識によって判断されます。

▶ 抜き足差し足で、彼は鉄の扉に近づいた。

→ **Walking on tiptoe**, he approached the iron door.

1) **As he walked** on tiptoe, he approached the iron door.

2) **He walked** on tiptoe, **and** he approached the iron door.

例文を便宜的に“as”で書きかえた1)は時間が同時であるという点が不自然に強調された文になり、“and”を用いた2)は両方の節に同等の重みを感じられます。この分詞構文は1)でも2)でもない、いわば「**付帯状況**」を表すものです。

暗示的なあいまいさ、きびきびとした簡潔性などが分詞構文の特徴であり、そのために書きことばにおいて、近來ますます用法が拡大されてきています。

▶ 彼女は私に近づいてきて、じっと私の顔を見つめながら手を私の腕においた。

→ She came close to me and **laid her hand on my arm, looking up in my face**.

“laid”と“looking up”はいわば同時進行しています。つまり、どちらが先かあいまいな感じを出しているのです。これを接続詞(例えばand)を使って書くと、それが明らかになってしまいますし、文全体が間延びして、締まりのない感じを与えることになります。